

「闇の中、恵みと導きの光が・・・」

ヨハネによる福音書 5章9b～18節

「聖書は出会いの書である」と記したことがあります。覚えていらっしゃるでしょうか。実際、聖書は「一期一会の書」「千載一遇の書」と言っても過言でないのではないのでしょうか。そこでは様々な人たちがイエス・キリストと一期一会の出会いをし、千載一遇の出会いをしています。それはとりもなおさず、そこで同じように主イエスと繰り返し新たに出会うようにとこの私たちを招く、招きの語りかけでもあるように思われます。

とはいうものの同時に、せっかく千載一遇の時に巡り合い、イエス・キリストとの一期一会の又とない出会いの時を与えられても、皆が皆、主イエスの真実に心を開いて真のいのちに進み入るともかぎらない。それで救われる人もいれば、そうならない人もいます。残念ながら、それもまた事実と言わざるをえないでしょう。その両方を、聖書は有りのまま、赤裸々に記しています。その最たる例が、私たちの読み進めている「ヨハネによる福音書」の5章の「ベトザタの池の病人」と9章の「シロアムの池の盲人」の二人と言えるのではないのでしょうか。「ベトザタの池の病人」については、前回 学んだとおりです。「シロアムの池の盲人」については いずれ学ぶこととなりますが、「生まれつき 目の見えない人」(ヨハネ 9:1) がいて、その人がイエス・キリストに見えるようにしていただくという出来事です。これらの二人は全く同じように、思いもかけず 主イエスに出会い、そしてまた 全く同じように、思いもかけず 主イエスに癒やしていただきました。けれども、一方は前よりさらに深い闇の中へと向かったのに対し、もう一方はそれとは対照的に、光の世界に導き入れられました。なぜ、そうなったのか。二人の違いは いったい、どこにあるのか。その分かれ道を、聖書は「光と闇」の分かれ道として描きます。そして そこに、「いのちと死」の分かれ道もまた あるように思われています。

今月は、前回からの続きとして、その反面教師的なほうの「ベトザタの池の病人」のその後から学ぶことにいたしましょう。題材自体は暗い闇の出来事ですが、がそこにおいてもなお、イエス・キリストの熱い捨て身の姿が私たちに迫ります。私たちはその御姿に触れ、そこから光に進み行く者にされたいと願います。

ところで、本題に入る前に一つ 考えてみたいことがあるのですが、皆様はどうお考えになられるでしょうか。それは、こういうことです。人間の嫌らしさの中でもとりわけというのは、はたして何だろうか。言い換えれば、卑怯や卑劣といった その歪んだ側面のことで、その中でもことさらにそう思われるもの、ということです。どうお思いになられるでしょうか。私が思うには、その一つは

間違いなく、自分の身を守るために人を売ることかと思えます。人の期待を裏切って、そうする。この言い様のない醜さに、どれだけの人が耐えられるのでしょうか。しかも、事はそれだけではありません。それと同時に、その根っこを掘り下げて見詰めるとき、それは目に見える形でのいわゆる裏切りにとどまらないことにも気づかされるからです。それは実のところ、私たちのよく知る自分可愛さの狡さと、すなわち 保身の狡さと根を同じくするものではないか。そう思われもするのです。私たちは自分を守るために言い訳にもならぬ言い訳をして 人に責任を押し付け、また自分自身をも強引に納得させて、それで自分の体面や安全を守る。そんなことをすることが時にありはしないのでしょうか。私は、ここでもまた、私たち人間の奥深くに潜む闇の暗さを見せられる思いがします。

実際、聖書も、こうした保身の闇を深い闇として描いています。とりわけ イエス・キリストとの関わりのなかで、そのしぶとさ・手強さを映し出します。今月の箇所もその好例と言えるでしょう。登場するのは、前回 主イエスから病を癒やされた、あのベトザタの池の男です。「その日は安息日であった」(9b) と、聖書は切り出します。そして、今回のメッセージを読み解くかぎもここに隠されているように思われます。

その日は「安息日」でした。癒やされた男は池を後にし、エルサレムの市内に向かっていたでしょう。と じぎ、ユダヤ教の指導者たちが騒ぎを聞きつけ、男のもとにやってきます。そして、問い質します。10 節以下です。「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは、律法で許されていない」(10)。それは、律法にこう定められていたからでした。「もしも安息日に公の場所から自分の家に故意に物を運ぶ者があるなら、その人間は罰せられて、死ぬまで石を投げつけられる」。文字は人を殺す、と言われることがあります。人が救われることより、形だけの決まりや規定を守ることにより心を奪われる人々はいつの時代にもいるものです。加えて、自分たちの地位や立場を守る思いに取り憑かれているとしたら、人をいのちに生かすことが二の次、三の次にされても不思議はないのではないのでしょうか。彼らも初めは、神を想う熱心から事を始めたはずなのに・・・どこでおかしくなってしまったのか。どこに、大事なものを置き忘れてしまったのか。しかし、イエス・キリストは一貫して、物事の中身に目を向けられ、事の本質と内実をこそ問題にされました。そのようにして、人を真実 生かす業をし続けられました。そんな主イエスの姿を目の当たりにして、ユダヤの当局者らは だからこそ逆に、イエスは自分たちの体制を脅かす者だ、と その危険性を敏感に感じ取っていたのでしょうか。まさに、そんな最中の事件です。これ幸い、又とない口実を得た、と 彼らは飛びついたのでないのでしょうか。

実際、ユダヤ教の教師たちは 当時、安息日について、驚くほどの徹底さで 細かな規定を作り上げていました。安息日とは、ユダヤの暦の数え方で「金曜日の日没から土曜日の日没に至る一日」を指します。天地創造の業を終えられた神が「第七の日に・・・御自分の仕事を離れ、安息なさった」(創世記 2:2) と記す、旧約聖書の「創世記」の言葉に基づいています。この言葉に基づき、ユダヤ教の教師たちは、安息日に労働することを一切 禁じたのでした。その規定はまず大きく

39 の種類に分類され、その後、それぞれについて さらに細かく、何百何千という決まりに拡大されてきました。面白いというか、驚くような例を御紹介しましょう。「安息日には、ランプの灯りで読み物をしてはならない」との規定。さて、どうしてだと思われるでしょうか。こんな理由からだといえます。言うまでもなく、当時は電気などありませんから、ランプには油が使われていました。そこで、灯りをいつも明るく保つためには、ランプを時々 傾けたり叩いたりして、油がうまく芯に染み込むようにしなければなりません。ところが、事は安息日です。明るさが多少 不安定でも気にならなければいいのですが、時に 読書に熱中するあまり、その日が安息日であることを忘れてしまうかも。そして ついつい、ランプを傾けてしまう。叩いてしまう。となると、それは労働ということになるわけで、安息日の規定違反になってしまいます。だから、そんなことにならないよう、初めから禁止しておくということ。正解は、そういうことなのだそうです。もう一つ、今度はクイズ形式で御紹介してみましよう。はたして 答えられるでしょうか。「安息日のことです。歯が痛くなりました。ユダヤでは当時、歯痛にはお酢を使って痛みを和らげていましたが、ここでクエスチョンです。安息日にそれをして、はたして問題はないか。安息日に歯痛をなんとかするには、どうしたらよいか。安息日には、労働は許されない。これを念頭に置いて考えてみてください」。ここでお答えを頂くわけにもいきませんので、ユダヤ教の教師・ラビの正解を申し上げます。こんなふうです。「安息日であるから、いつものように歯に酢を垂らして痛みを和らげることは許されない。それは労働に当たる。ただし、通常の食事の一環として、酢を食すること。それは、労働には当たらない。であるから、食事と一緒に、その一部として酢を食し、それで痛む歯を湿らせればよいのだ」。いかがでしょうか。難易度抜群の超絶論理で、啞然とさせられないでしょうか。

つまり、事ほどさように、私たちの想像を超えた数の決まりが 当時、安息日について定められていたということです。そして、ベトザタの池の男は藁のベッドを運んで、その一つを破った。そこで、ユダヤの当局者が男を詰問するのです。12 節です。「お前に『床を担いで歩きなさい』と言ったのはだれだ」。ところが、問題はここからです。男はこの問いに答えられません。「しかし、病気をいやしていただいた人は、それがだれであるか知らなかった」と、13 節はそう記しています。だとしたら、ここに 男の人となりか垣間見られるのではないか。少なからず それを感じ取れはしないか、と思わされます。イエス・キリストに癒やしていただいたのに、何も聞かず、名前すら尋ねない。普通なら、ちょっと考えられないことです。歩けることに夢中になって、もしかすると、うっかり忘れてしまったのかもしれない。けれども、38 年も苦しんだ病を癒やされたのです。癒やして下さった方のことを忘れるなんて・・・、自分のことしか眼中になかったのでは・・・、と言われてもしかたないほどの鈍感さではないでしょうか。そうこうしているうちに、主イエスは彼のもとを立ち去られた、と 13 節は続けて語っています。

イエス・キリストは、男の苦しみに目を瞑ってはいられなかった。男の悲しみを思う思いに突き

動かされて、その病を癒やされたのでした。なのに、当の男のほうは主イエスの名前すら聞かずに立ち去ってしまった。しかも、事はこれだけで終わりません。これだけで終わっていたなら、まだ救われたことでしょう。癒やしてくれた人がイエス・キリストだと分かっても、そのまま何もせずに黙っていたなら、まだ良かった。しかし 男はさらにも卑しい行為を行なってしまいます。何より卑劣で卑しむべきそれ、告げ口です。密告でした。自分を守るため、ユダヤの当局者に主イエスを引き渡して、売ったのでした。そもそも、安息日に床を担いでいたことを責められたとき、男はこう言って、自分を守ろうとしました。11 節、「わたしをいやしてくださった方が、『床を担いで歩きなさい』と言われたのです」。つまり、自分からやったんじゃない、と そう言ったのでした。責任の転嫁、擦り付けです。こともあろうに、自分を癒やしてくださったお方に責任を押し付け、そして自分は危険から逃れようとする。人を踏み台にして、その場をうまくやり過ごそうとする。そんな言い訳の言葉で、下心が透けて見えるようではないでしょうか。

ユダヤの当局者にとって、イエス・キリストは目の上のこぶで、その敵意が日増しに膨れ上がっていました。イエスと関わりがあるなんて思われたら、とんでもないことになる。男はそう感じ取って、とっさに 自分の身を守る道を考えます。それが告げ口の密告でした。聖書は記します。「この人は立ち去って、自分をいやしたのはイエスだと、ユダヤ人たちに知らせた」(15)。男は誘惑に負けたのです。自分可愛さの、我が身を守るという誘惑に。こうして、男は保身を繰り返し、その身に現わされた神の御業に立ち続けることができませんでした。

男は、池の畔にいたときは それでもまだ、他人を責めることができました。「いざとなりゃあ、みんな、自分のことしか考えやしない」。そう言って、人を詰ることができました。けれどももはや、それはできません。その生い立ちや生涯に同情の余地はあるものの、しかし、自分もまた結局、同じような人間であることが露わにされたからです。神殿で再会した男に、イエス・キリストは言われました。「あなたは良くなったのだ」(14)。男は主イエスに、そう言っていただいた。癒やされて、新しいいのちの道の入り口に立たせてもらって、そして、そのような祝福の言葉で背中を押していただいたのです。であれば、その恵みの内に留まり、それを下さったイエス・キリストに信頼して、その道をしっかりと進むべきでした。しかしながら、男は依然として、病を病んでいたのでしょう。体の病気よりもずっと深刻な「いのちの病」を、です。主イエスは 14 節で続けて、「もう、罪を犯してはいけない。さもないと、もっと悪いことが起こるかもしれない」と言っておられますが、それはまさに、この病のことを意味しているのではないのでしょうか。ヨハネの福音書はこれを「闇」と呼びます。物事の真実が見えない。信頼すべきお方に信頼できない。それをヨハネは闇の心と呼びますが、しかし、それはひとり「ベトザタの池の男」だけのものでもないのでないか。そのように思われるのですが、いかがでしょうか。すなわち、ヨハネは翻って、この私たちにも問いかけているのではないか。それははたして、ベトザタの池の男だけのそれであろうか。形を変え、言葉を変えて、同質のそれが誰の内にも潜んではいないか、と。御子イエス・キリストはその闇に向かって立たれ、そこから 私たちをいのちの道に連れ出そうとしてくださっている

ように思うのです。「あなたは良くなったのだ。もう、罪を犯してはいけない」と。

ベトザタの池の男に関連して、次のような説教を目にしたことがあります。20 世紀前半のアメリカにおけるもので、多少 時代を感じさせはしますが、厳しいながらも しかし私たちの現実を突いた説教で、なおかつ それでいて恵みに満ちた温かな語りかけです。結びの部分だけを御紹介いたします。

この池の病人は、体だけでなく、心も深く病んでいました。もし、この世に神の恵みが存在しないとしたら、男はすぐにでも裁かれたことでしょう。男がこの後^{あと}どうなったか、私には分かりません。願わくは、自分の罪の深さに気づき、主のもとに立ち戻らんことを、と ただ祈るばかりです。しかし、事はこの池の男だけの問題ではありません。もし、この世に神の恵みが存在しないとしたら、この私はいったい どうなるでしょうか。(牧師がこう言ったのを聞いて、会衆席から 人々の笑い声が聞こえました。が、その直後でした。少し間を置いて、その牧師はこう続けたのです。)もし、この世に神の恵みが存在しないとしたら、私はいったい どうなるか。誰もいない会衆席に向かって説教せねばならなくなります。私たちは一人残らず、神の恵みがあって初めて、ここでこうして礼拝することを許されているのです。その恵みに対する感謝をくれぐれも忘れないでいたいと思います。

ちなみに、仮に私が説教者だとして、同じ説教をしろと言われても、私にはどうにもできるものではありません。会衆席が空っぽになる前に、説教者である自分が席を立ち、壇上から降りねばならないからです。しかしながら、御紹介した説教の主旨は明らかで、また 的を射たものでもあるのではないのでしょうか。つまり、ベトザタの池の男のように 密告をして人を売るなどという、そうしたあからさまな卑劣は、私たちはたしかに しないかもしれない。けれども、自身をどこかで良識ある善人と思っているふしのある この私たちもまた、自分可愛^{かわい}さに理屈^こを捏ねたり、言い訳をしたり取り繕ったりして、都合の悪い場をうまくやり過ごすようなことがありますはしないか。時には、巧みな陰口やチクリで 人の足を引っ張ったりすらして……。そうやって、人の信頼を損なう。また、主イエスに真っすぐ誠実に向かうことをせず、信仰を ^{みずか} 自らの都合に合わせて融通する。そして、神に対する姿勢を上手に誤魔化^{じょうず}し緩めて、それを真実みの薄いものとしてゆく……。というようなことがはたしてないだろうか。説教はそう問いかけているのだらうと思います。ベトザタの池の男の出来事は 決して、自分と関係のない他人^{ひとごと}事ではないように思われます。男の闇は少なからず そのまま私たちの闇でもあり、私たちもまた、神の恵みに支えられて初めて 今あるを得ているのではないのでしょうか。その感謝を忘れずにいたい。そう思わされています。

他方、事はユダヤ教の教師たちも同じでした。彼らもまた、我が身可愛^{かわい}さの保身に心を奪われていたからです。自分たちに都合のいいその体制を守ることに躍起でした。福音書は記しています。「ユダヤ人たちはイエスを迫害し始めた。イエスが、安息日^{あんそくび}にこのようなことをしておられたからである」(16)。一人の男が38年にも及ぶ苦しみから解き放たれたのです。なんとうれしい喜びの出来事でしょうか。がしかし、ユダヤの指導者たちはひと言もそのことに触れません。そんなことなど、眼中にないのでしょうか。人が苦しみから救われたのに、彼らは他人事^{ひとごと}のように男を冷たい目で眺め、主イエスを陥れる材料にします。彼らにとって問題なのは人の救いではなく、自分たちに都合のいいあれこれだった、とそう言われてもしかたのない態度ではないのでしょうか。ユダヤの指導者たちは、イエス・キリストの言行^{みむね}が神の御旨に照らしてどうなのか、その真実さや適切^{うんぬん}さを云々することなどしません。俺たちの主張や慣習に抵触し、伝統の体制を脅かしかねない。それだけで十分、相手は厄介者とみなされたようです。彼らも初めは、神を想う熱心から事を始めたはずなのに・・・どこでおかしくなってしまったのか。どこに、大事なものを置き忘れてしまったのか。保身や先入観や思い込みは人の目を見えなくさせる、とはよく言われるところですが、いつの時代も変わりはないのでしょうか。自分が見たいこと・聞きたいことだけにしか目が行かなくなり、耳が開かなくなる。その枷^{かせ}に、ユダヤ人たちは囚^{とら}われていた。そして、気に入るところも気に入らないところも丸ごと含めて主イエスに目を向け、その言葉に聴かねばならないのに、それができなくなっていたのです。そのようにして、神の下さる豊かないのちが失われ、神の射し入れてくださるその光が見えなくなっていたのではないのでしょうか。けれどもまた、それは同時に、ひとり彼らだけのことでなく、時代を超えてこの私たちの問題でもあるということ。それを知っておくのは大切なことのように思われています。

そんななか、イエス・キリストははっきりと言い切られます。17節、「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」。そもそも、安息日^{あんそくび}とは禁止の日ではなく、天地創造^{わぞ}の業の完成を喜ぶ「喜びの日」であり、「祝福の日」でした。また、神が創造の業を終えて休まれた「休息の日」であり、「癒やしの日」でした。創世記は次のように記しています。「天地万物^{てんちばんぶつ}は完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別^{せいべつ}された」(創世記2:1~3)。こうして、第7の日が「安息の日」として定められたのです。ですから、安息日とはむしろ、良いものや命あるものの完成を意味する業の象徴として、それらを生み出す業の象徴としてあったものでした。私たち・キリストの教会は、良いものや命あるものの源は復活の主イエスにこそあると信じ、安息日をユダヤ教の土曜日から甦^{よみがえ}りの日曜日に移してこれを「主の日」とし、日曜に礼拝をまもるようになりました。その意味で、私たちの礼拝もまた喜びの時・祝福の時・癒やしの時であり、いのちある良きものを生み出す時にほかなりません。安息日の元々の意味合いはこうしたところにこそあったのに、主イエスの当

時、その内実が失われ、規定や形式ばかりのものになっていた。その歪んだ状況を イエス・キリストは指摘して、正されたのでした。喜びと祝福の日が禁止と裁きの日となり、休息と癒やしの日が規則の重荷を負わせるだけの日になり下がってしまった。そのようにして、本来 人を生かすべき日が人を縛って管理する日とされてしまっていた。それが、当時の実情でした。

以前、ある教会で教会学校の成人科に出席したとき、信仰の中身と形式の問題が議論になったことがあります。聖書の箇所は、「善いサマリア人の譬え」(ルカ 10:25~37) のところでした。譬えでは、通りかかった初めの 2 人、すなわち祭司とレビ人は傷ついた旅人を見ても助けず、そのまま見過ごしにしていってしまいます。二人共、ユダヤ教の神殿に仕える、いわば聖職者です。その二人がふたり共、助けを必要としている人を見捨てていってしまう。そこには当時のユダヤ教に対する主イエスの厳しい批判が込められているのですが、そうした行動を正当化する(幾つかある)言い訳の一つとして、そこで事に拘らなくては お勤めの時間に間に合わなくなる、といった例が挙げられていました。そこで、私はクラスの方々に、次のように尋ねてみました。「肉体的なことでも精神的なことでもかまいません。日曜日の礼拝の直前に、牧師が万一 人のいのちに関わる事態に巻き込まれたとしたら、礼拝の時間をどうにかしてでも 牧師はそのいのちを救わねばならないと思うのですが、いかがでしょうか。譬えの二人はそうすべきだったのに、それをしなかった。それは やはり、問題だと思うのですが・・・」。すると、一人の方がこう言って、反論をされたのです。「マザー・テレサは、礼拝こそが自分のエネルギーの源である、と言っています。どんなに忙しくても、礼拝だけは欠かさない。それがなくなったら、自分は神様の御業に仕えられなくなる、とも言っています。やはり、礼拝を第一にすべきじゃないでしょうか」。たしかに、マザー・テレサはそのように語ってはいます。マザーは、日に数回のミサの時間を 何よりも大切にされました。がしかし、だからといって、目の前にもしも死にかけている人がいて 彼女の手を握ろうとしたなら、マザーははたして どうされたか。その手を振り払って、ミサに遅刻しないように飛んでいったらどうか。もちろん、マザー・テレサがそんなことをしようはずがありません。万が一にもそんなことをしたとしたら、その点に関するかぎり、たとえマザーといえども、私は受け入れることができません。いのちのない 死んだ形式主義・教条主義に墮してしまうからです。成人科の議論も、時間や人の融通さえ図れば何とでもなるようなものです。そもそも、マザー・テレサは律法的な意味で「礼拝第一」と言われたわけではないのですが、反論をされた方とやり取りは 残念ながら、時間切れ。中途半端で終わってしまいました。

礼拝がすべての出発点であるのは、言うまでもありません。それを、自分に都合のいい言い訳で好い加減にするのは論外と思います。礼拝を、自分の都合に売り渡してはならない。それが基本でしょう。しかし、たとえそうであっても、礼拝の「心」を失ってしまえば 元も子もありません。何事も本来、心があつて、事が生まれる。中身があつて、そこから 形式や決まりが生まれるからです。それを逆にして、形式や規定・規則ばかりに気を取られ、元の心を忘れてしまえば・・・。喜びも

祝福も、休息も癒やしも、そのすべてが失われていくのではないのでしょうか。そして、いのちある良いものがそこで、絶え絶えの息になっていく。そう思われてなりません。

イエス・キリストが異を唱えられたのは いったい、何に対してでしょうか。単に、決まりを緩くするように、とおっしゃられたのか。言うまでもなく、そうではないでしょう。主イエスはユダヤ教の律法の根っこの事柄を、すなわち その心とその中身とを問題にされたのではないのでしょうか。そして、言われます。「たとえ安息日^{あんそくび}であっても、いや いのちある良いものを生み出す安息日ならばなおさらのこと、慈しみの^{わさ}業^やを止めるようなことは 父は決してなさない。父は働かれる。だから、私もそれを止めない」。神の御旨^{みむね}を正しく理解し、それに素直に従うなら、安息日を理由にいのちの業^やを止めさせるようなことなど あってはならない。それどころか、いついかなる時でも、それは し続けなければならない。イエス・キリストはそう言わんとされたのではないのでしょうか。

こうして、ユダヤの指導者たちは、自分たちの築き上げたものが根っこから揺すぶられる恐れをおぼえるようになります。しかも、「イエスは自分を神と等しい者にしている」(18) と そうも感じて、彼らは敵意をさらにも深くしていきます。要するに、イエスは自分を この俺たちよりも上に立つ者としている、と そう感じ取って、危機感を強めたのでした。「このために、ユダヤ人たちは、ますます イエスを殺そうとねらうようになった」。ヨハネは同じ 18 節で、そう記しています。

ベトザタの池の男は なぜ、闇の中に進み行ってしまったのでしょうか。ユダヤの指導者たちは どうして、闇の中から抜け出せなかったのでしょうか。理由を挙げれば、一つならず挙げることができるでしょう。ですが、何より根本的な原因は、自分を守る保身の誘惑に勝つことができなかつたということ。そのため、主イエスを真っすぐに見詰め、その言葉と業^{わざ}のすべてを素直に受け止めることができなかつたということ。そこに、何より本質的な原因があつたように思われます。我が身の可愛^{かわい}さが先に立ち、自分の利害と好き嫌いが先に立って、それらに合わないイエスは上手^{じょうず}に脇にやる。そして、そんなイエスはそもそもいなかったことにしていく。それが、彼らの分かれ道だつたのではないのでしょうか。そして、それはまた、この私たちの分かれ道でもあるように思われます。イエス・キリストは安息日^{あんそくび}の規定を犯してまでして、そのようにして 命の危険を冒してまでして、男を闇から救い出そうとされました。主イエスは、保身ということを決してなさらなかつた。命の危険に常に身を曝^{さら}しながら、救いの業^{わざ}をなし続けられました。16 節に、こうあります。「イエスが、安息日にこのようなことをしておられたからである」と。つまり、イエス・キリストが安息日の決まりを破られたのは、これが初めてではない。繰り返し、何度も破っておられた、というのです。だとすれば、命が幾つあつても足りません。が、主イエスはそうまでして、自分から進んで リスクを身に負われました。誰のためか。何のためか。愛する人々のためであり、また 私たちのため

はないでしょうか。空虚でない、真^{まこと}のいのちと呼ぶにふさわしい そのようないのちの在り^あ処^かを身をもって示し、そこへと この私たちを招き入れてくださるためではないでしょうか。

私たちに、自由が与えられています。右に行くのも自由、左に行くのも自由です。けれども、その自由を、闇へと進み行くものにするのか？ また、闇に留^{とど}まるものとするのか？ それとも、闇から光へ向かうものとするのか？ 池の男がもし 闇から立ち戻れるとしたら、それは、イエス・キリストが言われた言葉に立ち返ることではないでしょうか。「あなたは良くなったのだ。もう、罪を犯してはいけない」。この言葉に立ち返って、そこに立ち続ける以外にないのではないのでしょうか。それは、より直^{ちよく}截^{せつ}な言い方をすれば、頂いた恵みに留^{とど}まるということ。すでに頂いた恵みに留^{とど}まり続^{つづ}け、また、これから頂くであろう恵みに留^{とど}まり続^{つづ}けることだろうと思います。そのためにも、主イエスに目を凝らし、そこから目を離さずに、闇から連れ出してくれるその光についてゆくことではないか。その光に連れられて、そうしていくことではないか、と そう思わされています。

それは「神と等しい者」の光です。この一語には 実は、これまで述べてきた以上の問題とより決定的な意味合いとが含まれていますが、—それについてはまた、別の箇所^{ところ}で改めて触れることとして—いずれにせよ、そのようなお方 イエス・キリストがそこにいてくださっているのですから、私たちに過ぎた心配は無用ではないか。そのような主イエスに連れられて、そこについていく私たちに、言い知れぬ安心感が伴うように感じられます。

闇の中、恵みと導きの光が・・・

〔祈り〕

愛する神さま。

私たちは、人の姿の内に自分自身の姿を垣^か間^ま見せられます。そのようにして、ベトザタの池の男の内に、またユダヤの指導者たちの内に、自^みらにも潜^みむ闇の陰を感じさせられます。

あなたはそのただ中に、御^み子^こを送ってくださいました。私たちは 今、その光が闇の中で輝いているのを見ます。恵みの光を感謝いたします。導きのそれを感謝いたします。

光の元なる御^み子^こイエス・キリストに、私たちの目を向けさせてください。その十字架の出来事に、私たちの目を据えさせてください。そこに目を凝らし、その恵みの事実を憶えて歩み続けることができますように。そこに留^{とど}まり続^{つづ}け、そこから あなたの御^み旨^{むね}に^お応^おえて生きることができるよう、私たちを強く立たせてください。

ウクライナの不条理な惨劇の上に、あなたが的確な顧み^{かみ}を置かれることを願い求めつつ。

主^みの御^み名^なによって願い、お祈りいたします。

アーメン